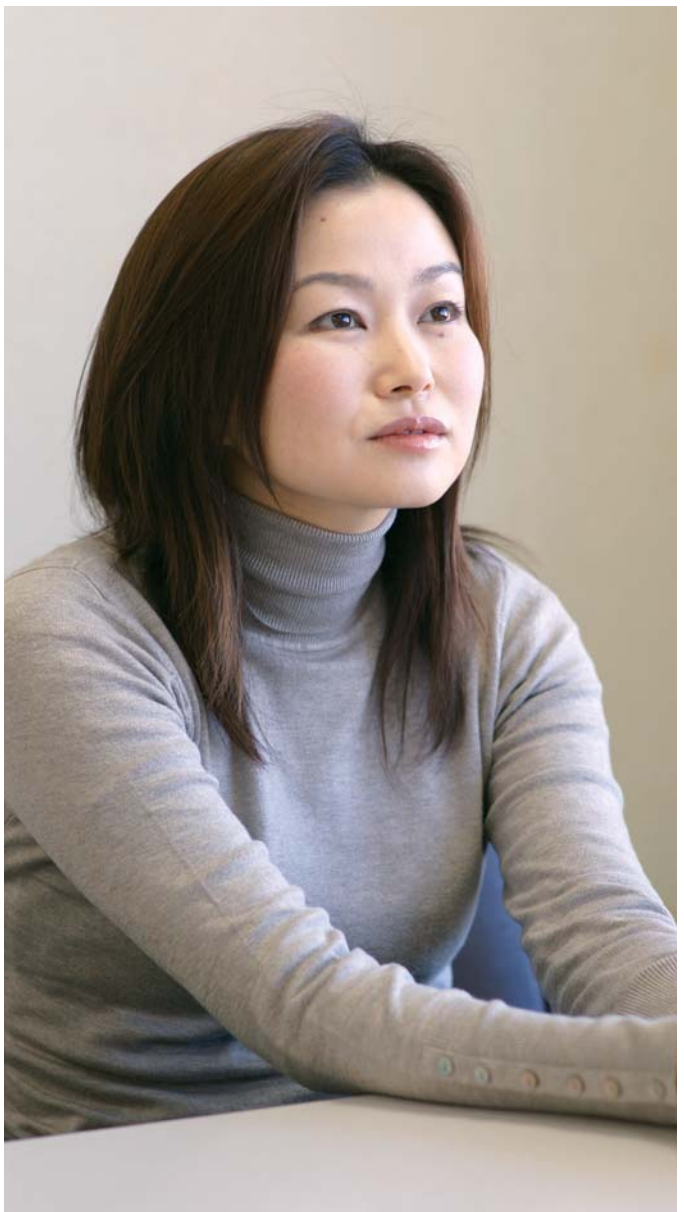

マスター to アーティスト

【第8回】

＜「拘(こだわ)り」を持たない＞

伊藤孝子　音楽学部 音楽文化創造学科 音楽療法コース 講師

（いとう たかこ）
1974年　広島県生まれ
1998年　広島大学教育学部音楽教育学専修卒業
2000年　広島大学大学院教育学研究科博士課程前期修了
2001年　広島大学大学院生物圏科学研究科博士課程後期退学

音楽が感情に与える影響について研究を行う。障害児を対象とした音楽療法の実践に携わり、広島心理教育相談室音楽療育部（代表：松原まゆみ氏）にて子どもを対象とした音楽療法実践の指導を受ける。現在、名古屋芸術大学音楽療法コース卒業生とともに、音楽療法グループ「マイエ」を立ち上げ活動中。

【拘る】こだわる　①さわる。さしさわる。さまたげとなる。　②気にしなくてもいいような些細なことにとらわれる。拘泥する。（広辞苑より）　今でこそ「こだわりの一品」などというように、肯定的な意味で使われることの多い「こだわり」という言葉。本来の意味は、些細なことに心が捕らえられて前へ進めない状態を表す言葉だ。「『拘りを持たない』ということかもしれません」。この言葉は、その本来的な意味を思い起こさせるものだった。

本を読んだり、研究することが好きだった。幼い頃からピアノのレッスンを受けていたが、音楽の道よりも勉学の道を選んだ。しかし、学生時代、教育学部という枠の中で、自分が教鞭に立ち生徒に教えていく…、そのイメージに漠然とした不安を持っていた。そんな就職と将来に思い悩む学生に転機が訪れた。音楽療法の現場を垣間見たことだった。

「初めて見た世界でした。重度の障害児、子供さんだったんですけど、その子にその場で、動きや声に合わせて即興的に音楽でコミュニケーションをとっていくんです。『へぇーっ』と、驚きましたね」　音楽の持つ可能性、そしてライブ感に感嘆した。自分の知らない音楽の世界、本や論文の中だけではわからなかった音楽の可能性が、そこにはあった。言葉を発することのできなかった、目を合わせることすらできなかった子供が、音楽の助けを借りて、活き活きと楽しむ場面に遭遇したのだ。音楽療法士が行う、即興でピアノを弾くことや音楽の使い方など、自分にはとても真似できないと思ったが「面白い」という興味が惹きつけた。

音楽の世界では、音楽と商業主義との関係について考えさせられることは多いが、音楽そのものの目的やその対象者について問われることはさほど多くはない。自己表現を研鑽することと、より多くのリスナーに受け入れられること、このことが音楽にとって自明の理と考えられる。しかし、音楽療法は、たった一人のための音楽である。音楽療法士が、患者のために奏でるそのためだけの音楽。アートとデザインの関係を思い起こさせられはしないだろうか。

音楽の体をなさず、ただの音だけの場合もある。他者から見れば、場合によっては退屈なものかもしれない。しかし、セラピストとクライエントとの間には、濃厚なコミュニケーションが幾重にも重なり合い共鳴しあう音楽療法の音の世界。「音楽療法の音楽にも表現はあります。それは、自分の表現では

音楽療法室にて

音楽療法室は、さながらおもちゃ箱のよう。音楽療法で用いるあらゆる音の元が詰まっている。打楽器、民族楽器、おもちゃの楽器と、あらゆる音の出るものが集められていて、単純に楽しい。「少しでも患者さんの気を惹けるものをと、増えていきました」。学生と一緒に打ち鳴らす姿は楽しさいっぱい。

なくて、相手側の表現であったり、もっと広い意味での音楽外の表現を引き出すこともありますね。いわゆる音楽的な、自分の表現で相手を感動させる、というのではないですね。でも、きっと演奏する方にとっては突き詰めれば、同じことじゃないかとも思うんです。相手に自分を伝えられるかということですから」。

「学生たちには、自分の好きなことをやっておくことが一番、と勧めています。自分の表現を追求しておいたほうがいいと…、そうじゃないと、いつか心が折れてしまうんですよ」。音楽療法士に職業として向かうことには厳しさもある。多くの人が、自分自身が音楽に救われたことを思い、あるいは、クライエントのために働く療法士の姿に憧れを抱く。その憧れの気持ちは大切なものだが、それ以上に必要なものがあるという。「人の役に立つことだけに自分の存在意義を求めていては駄目なんです。音楽療法の現場では、相手に拒否されてしまうこともあります。思うようにならないことをたくさん経験することになります。それを超えていかなければなりません。学生の頃によく学び、よく遊び、ときに思うようにならない経験も必要なものだと思います。それらが辛さを乗り越える力になってくれるんです」。精一杯、学び、遊び、自分の音楽を追求する。自分というものの核をしっかりと持っておくことが必要ということだろう。

そして、その上で冒頭の言葉「拘りを持たない」に辿り着く。「フラットな気持ちというか、拘りを待たないように努力すること、ですね。難しいんですけど…。音楽療法をやってきて、クライエントさんやそのお母さん方から学んだことは膨大なんです。経験を積んで、それなりに自分の中で、こういうものだというのができてくるんですけど、そうすることで新たなものを受け入れられなくなる。自分が変化する機会を逃してしまいます。人や、人の創作物から何かを吸収できるように、常に自分の状態を保っておくこと。そうありたいですね」。

苦労もあるが「単純に面白いところがあるんですよ」と穏やかに微笑む。人を対象にするだけに、相手に応じて自分が変わる必要があり、相手から学ぶことは尽きないという。「人を知るための題材に尽きない！」 人間への興味に魅了され続けている。